

[研究ノート] 精神科における病棟文化に関する文献レビュー

柴田真紀・田代誠・前澤尚子

看護学部看護学科

Psychiatric ward culture: a review of the literature

Maki SHIBATA, Makoto TASHIRO, Naoko MAESAWA

Abstract

The purpose of this study was to examine Japanese research on psychiatric ward culture and determine its position in the recent history of psychiatric nursing, and to clarify problems with such research. We searched for papers published between 2010 and September 20, 2019 using “psychiatric department,” “ward culture,” and “ward climate” as keywords, and conducted a literature review. Having compared and examined the purpose, subjects, and methods of the nine papers identified, we found that many of them were based on interviews with nurses and investigated how ward culture and ward climate influenced their nursing care. Such research has therefore tended to focus on nurses, making it poorly balanced in terms of study method. We suggest that to understand ward culture, which combines numerous complex factors, further studies are needed using a broader range of subjects and methods.

Keywords: psychiatric ward, ward culture, review, psychiatric nursing

1. 背景

日本の精神科医療においては、施設内から地域医療への移行が呼び掛けられて久しい。しかしながら、日本においてその歩みは遅く、精神科医療の地域移行を促進するためには、医療及びケアの質を上げることが急務であり、とりわけ精神科病院における取り組みは重要である。

精神科医療の地域移行が叫ばれているのは、人権的な問題もあるが、地域における対人関係及び社会とのかかわりが治療的な意味を持つからであり、リカバリーの概念が普及してきている¹⁾。治療的環境を整えることは、精神科医療の基本的要件である。過去の施設内中心の医療から、地域ケアシステムに移行するためには、地域のケアシステムを整えるのと同時に、施設内すなわち病棟における治療的環境を整えていく必要があり、治療環境がいかに作られているのかを明らかにする必要がある。そして、病棟文化は、治療環境を考えるのに重要なキーワードである。石川らは、退院支援に関する論文の中で、「精神科病棟においては、病院という閉鎖的な空間の中でかつての収容主義の名残や職種間のヒエラルキーなど、日本の精神医療現場に残存する特有の風土や文化が退院支援の障壁として影響している」と述べている²⁾。欧米諸国が 1960 年代から地域ケアシステムの必要性を訴えて地域

精神医療が進んだのに対し、その必要性を指摘されながらも地域移行が進まなかったわが国では、なおのこと病棟文化を見直す必要がある。

文化とは、広辞苑³⁾には「人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。衣食住をはじめ科学・技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治など生活形成の様式と内容を含む」と記され、人間の生活様式の全体を意味している。また、荻野⁴⁾は精神科病棟の文化に関する研究の中で「その集団の生活様式などの一連の体系として現れ出るものであり、その集団のメンバーが共有する価値観や信念、前提などと、メンバーの共有する情緒が相互に影響しあって創り上げられるもの」と定義し、精神科において治療的環境を整えるためには病棟文化の構造を理解する必要があると記している。

しかしながら、そこにはメンバーの共有する価値観、信念、行動様式、ルール、意味の付与の仕方、前提、メンバーの共有する情緒など、複数の要因⁴⁾が含まれ、複雑である。そこで、本研究では、病棟文化に関する研究がどのような目的で、どのような方法を用いてなされているのかを明らかにし、今後の研究の方向性への示唆を得たいと考えた。

2. 目的

本研究の目的は、日本国内の精神科における病棟文化に関する研究を集約し、近年の精神科看護における病棟文化に関する研究の位置づけおよび課題を明確にすることである。

3. 方法

3.1 データベースリサーチ

文献は、2010 年から 2019 年(9 月 20 日現在)までの過去 10 年間に発表された論文について、「精神科」and「病棟文化」と、病棟文化と概念の近い「病棟風土」というキーワードを用いて、「精神科」and「病棟風土」として医学中央雑誌Web、Ci Nii にて検索した。なお、病棟文化・病棟風土に類似した用語として、組織文化・組織風土があるが、今回は、組織には位置付けられない「患者」を含む、「病棟文化・病棟風土」を取り上げることとし、「組織文化・組織風土」とは区別した。

3.2 分析方法

検索結果から、病棟文化に関わる記述のある文献について選定し、会議録、精神科病棟について言及していないものを除外した。著者、研究目的、研究方法、結果の概要についてまとめ、病棟文化・病棟風土をどのように記述しているのかに焦点を当てて検討した。

4. 結果

4.1 検索結果

医学中央雑誌Webでは、「精神科」and「病棟文化」で検索したところ 7 件、「精神科」and「病棟風土」で 5 件の文献がヒットした。その中から会議録と精神科病棟に関する文献ではないもの、尺度開発に関わるものを除外し、9 件の文献を対象論文とした。

CiNii で検索したところ、「精神科」and「病棟文化」、「精神科」and「病棟風土」でそれぞれ 2 件ずつヒットしたが、すべて医学中央雑誌で検索したものと重複していた。

4.2 分析結果

対象となる文献について、概要をまとめたものを表 1 に示す。

9 論文のうち、病棟文化および病棟風土の用語について定義している論文はなかった。

研究目的において、病棟文化および病棟風土を明らかにすることを明記した論文は、1 件(文献 No.9)のみだった。その他の論文は、看護ケアや看護職員の認識に影響を及ぼす要因や、環境および管理の実態を明らかにすることを目的としており、看護職員にインタビューしたデータを病棟文化・病棟風土としてカテゴリー化して結果に記載して考察したもの(文献 No.1・2・3・5・7)、考察に病棟文化・病棟風土の概念を用いているもの(文献 No.6・8)だった。

病棟文化として検索された文献 6 件のうち、すべてが看護職員を研究対象とし、認識や体験に焦点を当てたものだった。

病棟風土として検索された文献でも 3 件のうち 2 件が看護師を対象として、その認識に焦点を当てたもので、これら 8 件の研究の対象はすべて看護職員であった。1 つの文献のみ、患者と看護師の双方を研究対象とし、調査を行っていた。

また研究方法は、質的研究方法が 8 件で、そのうち半構成的面接が 6 件と最も多く、実態調査 1 件、質問紙を用いて内容分析を行ったものが 1 件だった。

半構成的面接を用いた研究(文献 1・2・3・6)では、看護師やケアワーカーにインタビューし、看護師やケアワーカーの視点から看護判断やケアに影響を及ぼすものを明らかにし、病棟文化の側面から考察を行っていた。

柴田⁵⁾の論文(文献 1)では、看護師が患者の語りを聴く体験について看護師にインタビューし、スタッフの人間関係および病棟の暗黙のルールが、病棟文化として患者と看護師の語りや看護師の共感疲労に影響を及ぼすことを明らかにしていた。田村⁶⁾の論文(文献 2)では、病棟組織が共有する価値観やインフォーマルな病棟のルールを病棟文化としてとらえ、頓用薬と薬に関わる看護師の判断に影響を及ぼすことを明らかにしていた。松下⁷⁾の論文(文献 3)では、職員間の関係性に関わるデータを「病棟文化とスタッフ間力動」とカテゴリー化し、虐待や虐待リスクにつながる状況の背景として考察していた。刀根⁸⁾の論文(文献 6)では、病棟のルールや患者の生活スタイル、看護師のかかわり方を文化としてとらえ、病棟を異動してきた看護師に戸惑いをもたらす要因として分析していた。

一方で、篠塚ら⁹⁾の論文(文献 4)では、精神科病棟における頓用薬の投与に関わる看護師の判断について看護師にインタビューしているが、その結果を病棟文化として意味づけてはおらず、考察において先行文献から「病棟文化」という用語の引用はしているものの、検討はされていなかった。また、齋藤ら¹⁰⁾の研究(文献 7)および石井ら¹¹⁾の研究(文献 8)では、考察で病棟風土について触れられているものの、データの詳細は示されていなかった。

量的研究は 1 件(文献 9)のみで、病棟風土を測定する尺度を用い、全国 23 病院の患者と看護師の双方からデータを得て分析し、日本の精神科病棟風土を国内外で比較していた¹²⁾。

5. 考察

5.1 精神科における病棟文化への関心

今回のレビューにおいて、病棟文化および風土が看護師の看護判断やケアの質に影響を及ぼすことは複数の論文で明示され、病棟文化のうち、看護師の視点からの研究は進められていることが明らかとなった。また、「精神科」「病棟文化」あるいは「病棟風土」という、看護に限らないキーワード検索を行ったが、9 件中 8 件が看護師による論文であり、1 件のみ、医師による論文であった。このことから、看護師が病棟文化に対して関心を持っていることがわかる。

しかし、荻野³⁾が病棟文化として定義している中には、「患者」「病院が位置する都市の価値観」「現在の精神医療の価値観」「病院の理念」「入院している患者たちの社会的背景」などの

表 1. 文献一覧

| キー ワード | 文献 番号 | タイトル | 著者 発行年 | 目的 | 対象者 | データ 収集方法 | 分析 方法 |
|--------------|----------|-----------------------------------------------------------------|-------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------|----------------------|------------------------------|
| 精神科・ 病棟文化 | 1 | 精神科病棟における患者の語りを聴く看護師の感情体験—共感疲労の視点から | 柴田 2016 | 患者の語りを聴く看護師に共通する感情体験、なかでも「共感疲労」のありようについて明らかにし、看護において積極的に患者の語りを聴くかわりを発展させるためには何が必要かを考察する | 看護師 | 半構成的 面接 | 逐語録からカテゴリ ー化 |
| | 2 | 頓用薬と薬に関わる精神科看護師の判断とケア—慢性期統合失調症患者への対応に焦点を当てて | 田村 2016 | 慢性期統合失調症患者が頓用薬を頻回に要求してきた場面に焦点を当て、どのような根拠で判断し、ケアの提供に至るのかという一連のプロセスとそれに影響を与える要因を明らかにする | 看護師 | 半構成的 面接 | 逐語録からカテゴリ ー化 |
| | 3 | 精神科病院療養病棟のケアワーカーが捉える高齢者虐待と拘束—面接調査の結果より | 松下ら 2013 | 精神科病院療養病棟の介護スタッフの虐待や身体拘束に関する意識を明らかにする | ケアワ ーカー | 半構成的 面接 | 逐語録からカテゴリ ー化 |
| | 4 | 精神科病棟における頓用薬の投与にかかわる看護師の判断 | 篠塚ら 2012 | 頓用薬の投与にかかわる看護師の判断に影響を与える要因を明らかにする | 看護師 | 半構成的 面接 | 逐語録からカテゴリ ー化 |
| | 5 | 精神科病棟における禁煙化に関連した要因と禁煙化後の状況について | 加藤 2012 | 精神科病棟における禁煙化に関連した要因と禁煙化後の状況を明らかにすること | 病棟 管理者 | 半構成的 面接 | 内容分析 しカテゴリ ー化 |
| | 6 | 小児精神科開放病棟に異動してきた看護師の面接での戸惑い | 刀根 2010 | 小児精神科開放病棟に異動してきた看護師が、看護面接を行う際、どのような戸惑いを感じていたのかを明らかにする | 看護師 | 半構成的 面接 | 内容をグ ループ分 けしテー マを抽出 |
| 精神科・ 病棟風土 | 7 | A 県精神科病院看護管理者の業務改善とリーダーシップの認識—精神科看護師長会看護管理研修グループワークの意見集約から | 齋藤ら 2017 | A 県内の精神科病院に勤務する看護管理者により「リーダーシップ」と「継続的な業務改善」について話し合い、その実態を把握することにより課題を抽出する | 看護 管理者 | 問題点や 自己の考 えを検討 | 意見をカ テゴリ ー化 |
| | 8 | 長期入院患者の荷物増加に対する看護師の意識—自由記述式アンケート調査による病棟風土の実態と課題 | 石井ら 2016 | 長期入院に伴う患者の荷物増加に対する看護師の意識を明らかにする | 看護師 | 質問紙 調査 | 内容分析 しカテゴリ ー化 |
| | 9 | 患者および看護師が評価する精神科病棟の風土—エッセン精神科病棟風土評価スキーマ日本語版(EssenCES-JPN)を用いた検討 | 野田ら 2014 | 1. EssenCES-JPN の信頼性について確認すること 2. 患者およびスタッフの病棟風土に関する認識を諸外国の先行研究の結果と比較し、本邦の病棟風土の特徴を明らかにし、今後のあり方を考察すること | 患者と 看護師 | 質問紙 調査 | 因子分析 |

要素が示されているが、今回検討した論文は、9 論文のうち 8 件が看護職員を対象とした研究であり、偏りがあった。文化や風土を総合的にみるならば、患者や多職種、それ以外の視点から文化を明確にすることも必要だと考えられる。今後、研究対象を広げていく必要があるだろう。

今回は原著論文を対象としたが、病棟文化・風土に関わる文献では、総説として書かれているものも多く、その中には行動制限を最小化するための変革要因として病棟文化を取り上げているもの¹³⁾、治療的文化の必要性に言及したもの¹⁴⁾などがあり、臨床においては病棟文化が治療に影響を及ぼすことを実感しており、取り組むべき課題であることが示されている。

また、病棟文化・病棟風土をキーワードとして文献検討を行ったが、今回検討した各論文の中には文化と風土の使い分け、およびそれぞれの明確な定義はされていなかった。また、「病棟風土」を明らかにすることを研究目的に置いて書かれた論文¹²⁾も 1 件のみだった。この論文において、病棟風土を評価する指標は明示されているが、病棟文化および風土の構成を質的に分析したものはなかった。病棟文化および風土が治療に影響しているとみるならば、今後、病棟文化および風土がどのような要素から構成されているのか、質的な研究を深めていく必要がある。

そして、今回は対象とはしなかったが、「組織文化」あるいは「組織風土」については、看護管理の分野でも研究が進んでいる。今回取り上げた文献の中には、病棟における看護師組織の文化として読み取れるもの¹⁰⁾(文献 7)もあり、病棟文化と組織文化、組織風土との概念の整理も必要と思われる。

5.2 病棟文化を研究対象とすることの困難さ

今回の文献検討では、研究方法として用いられているのは 9 件中 6 件が半構成的面接であった。これにより、看護職者の視点から病棟文化を検討することは徐々に進んでいると思われる。しかし、病棟文化を構成するものは多岐にわたり、患者、医療者、病院を含む社会的背景など、複雑である。研究対象を広げていく必要性は先に述べたが、研究方法についても広げていく必要があるのではないだろうか。そもそも、文化を研究する方法としてエスノグラフィーという手法がある。しかし、研究者の経験的な学習が重要であるとされ¹⁵⁾、フィールドワークを基とした分厚い記述が求められる¹⁶⁾。近年では、松澤¹⁷⁾や東畑¹⁸⁾はその著作の中で精神科医療をめぐる文化を描き出しているが、数百ページにわたる著述となっている。そして、松澤はその著作の中で、参与観察することや臨床を記述することの難しさに触れつつも、重要な意味を持つとしている¹⁷⁾。

今回のレビューの結果を見ても、病棟文化をテーマとしてフィールドワークを行ったものは、近年では一つもなかった。年代を限らず検索しても、荻野⁴⁾の論文のみであった。このような手間と時間のかかる研究手法は敬遠されてしまうのかもしれないし、論文として発表するにはデータが膨大すぎて収まらないことも考えられる。今後、研究の対象や方法を広げ、病棟文化を構成するものについて、知見を統合していくことが

必要であろう。

6. 結論

精神科における病棟文化および病棟風土に関して、文献レビューを行った。2010 年から 2019 年の論文では、看護職者の視点から、看護ケアに影響を及ぼすものとして病棟文化および風土について考察されているものが多く、看護師の関心の高さが示された。しかし、研究対象やデータ収集方法には偏りがあり、病棟文化の全体を表す知見は得られなかった。複雑な構成要素を持つ病棟文化を明らかにするためには、研究の対象や方法を広げ、知見を統合していくことが必要である。

参考文献

- [1] 下平美智代, 山口創生, 伊藤順一郎:【精神障害者地域生活支援の国際比較】日本における精神障害者の地域生活支援 千葉県市川市の取り組み, 海外社会保障研究, 182, 4-15, (2013).
- [2] 石川かおり, 葛谷玲子:精神科ニューロングステイ患者を対象とした退院支援における看護師の困難, 岐阜県立看護大学紀要, 13(1), 55-66, (2013).
- [3] 広辞苑(第 7 版), 岩波書店, (2018)
- [4] 荻野雅: 我が国の精神科病棟の文化に関する記述的研究—3 つの精神科病棟の参与観察を通して—, 日本精神保健看護学会誌, 10(1), 50-62, (2001)
- [5] 柴田真紀: 精神科病棟における患者の語りを聴く看護師の感情体験-共感疲労の視点から-, 日本看護研究学会雑誌, 39(5), 29-41, (2016).
- [6] 田村達弥: 頓用薬と薬に関わる精神科看護師の判断とケア-慢性期統合失調症患者への対応に焦点を当てて-, 日本精神保健看護学会誌, 25(2), 1-11, (2016).
- [7] 松下年子, 岩沢純子, 箱石文恵: 精神科病院療養病棟のケアワーカーが捉える高齢者虐待と拘束-面接調査の結果より-, 横浜看護学雑誌, 6(1), 7-14, (2013).
- [8] 刀根優子: 小児精神科開放病棟に異動してきた看護師の面接での戸惑い, 日本看護学会論文集小児看護, 40, 126-128, (2010).
- [9] 篠塚あゆみ, 石井美香, 岡田浩亮, 白土沙織: 精神科病棟における頓用薬の投与にかかわる看護師の判断, 日本精神科看護学術集会誌, 55(2), 248-251, (2012).
- [10] 齋藤良昭, 川田幸和: A 県精神科病院看護管理者の業務改善とリーダーシップの認識-精神科看護師長会看護管理研修グループワークの意見集約から-, 日本精神科看護学術集会誌, 60(1), 60-61, (2017).
- [11] 石井千晴, 吉本登, 三好敏博, 上田龍, 松本朋, 長期入院患者の荷物増加に対する看護師の意識-自由記述式アンケート調査による病棟風土の実態と課題-, 日本精神科看護学術集会誌, 59(1), 38-39, (2016).
- [12] 野田寿恵, 佐藤真希子, 杉山直也, 吉浜文洋, 伊藤

弘人：患者および看護師が評価する精神科病棟の風土-エッセン精神科病棟風土評価スキーマ日本語版 (EssenCES-JPN)を用いた検討, 精神医学, 56(8), 715-722, (2014).

- [13] 吉浜文洋：【行動制限最小化のための技術】行動制限最小化のための変革-患者をコントロールする病棟文化から、患者と協働する病棟文化へ, 精神科看護, 34(3), 16-22, (2007).
- [14] 安保寛明：【治療環境としての看護師】精神科病棟が治療的文化をもつために必要なこと, 精神科看護, 38(9), 14-20, (2011).
- [15] 木下康仁：質的研究と記述の厚みーM-GTA・事例・エスノグラフィー, 弘文堂, 10-46, (2009).
- [16] 佐藤郁哉：フィールドワークの技法, 新曜社, 283-346, (2002)
- [17] 松澤和正：臨床で書く, 医学書院, 20-40, (2008).
- [18] 東畑開人：居るのはつらいよーケアとセラピーについての覚書, 医学書院, 1-347, (2019).